

# 統一原理とは

《至福の世界を求めて》

野村健二



※本書は、『幸福の探求』として出版していたものを改訂し、『統一原理とは』に改題したものです。

## 目次

改訂・第二版まえがき	1
第一版まえがき	4
第一部 人生の意義と目的	
第一章 幸福について	17
一 人生の目的	17
二 幸福の意義	19
三 幸福実現の条件	20
(1) 力と確信	20
(2) 力の方向(善悪)	22
利己主義・利他主義・公益と二重目的	
(3) 格位(主体と対象の相対関係)	34
(4) 四位基台(存在、作用、発展の根本原理)	37

(5) 人格——愛と価値創造欲 .....	41
愛について・価値創造欲（創造性）・愛と価値創造欲の同一性と相乗作用	
(6) 現実の人間の限界 .....	53
(7) 宗教的願望（死と罪の問題） .....	56
不動の心よりどころ・罪のゆるし、永遠の生命	

## 第二章 神について .....

..... 65

### 一 神の必要性 .....

..... 65

### 二 神の实在性 .....

..... 70

#### (1) 科学的側面からの検討 .....

..... 70

物質の成り立ち・精神と物質の同一性・経験的事実としての神・知覚意は脳の機能か？

#### (2) 宗教的側面からの検討 .....

..... 90

十字架信仰による救済の事実・宗教の遍在性と共通性・聖書の一言性

## 第二部 「統一原理」の概要

### 第一章 聖書と啓示 .....

..... 107

#### 一 聖書は神のみ言 .....

..... 110

#### 二 残された秘義と啓示 .....

..... 112

## 第二章 創造原理 .....

..... 119

### 一 新しい啓示 .....

..... 119

### 二 神の性質を知るには .....

..... 121

### 三 神の二性性相とは .....

..... 122

### 四 万有原力と授受作用 .....

..... 126

### 五 正分合作用と四位基台 .....

..... 128

### 六 神の創造目的 .....

..... 128

### 七 人間の創造目的 .....

..... 130

#### (1) 第一祝福——個性完成 .....

..... 133

#### (2) 第二祝福——子女繁殖 .....

..... 133

#### (3) 第三祝福——万物主管 .....

..... 135

八 成長期間と責任分担……………135

第三章 人間の罪〔墮落論〕……………139

一 罪の意味……………140

二 罪の報い……………143

三 罪の背景……………149

(1) 罪の伝播性……………149

(2) 罪の背後にある力——サタン……………152

罪の血統的遺伝・サタンに対抗するには

四 罪の根……………160

(1) エアンの園の物語……………161

(2) 生命の木と善悪を知る木……………165

(3) ヘビの正体……………169

(4) 天使と人間の犯罪……………172

天使と人間の本来の位置関係・愛の減少感〔嫉妬〕・エバへの野心

〔統一原理〕の解釈〔人間の犯罪・天使の犯罪・霊的墮落・肉体的墮落〕

(5) 原罪が不倫の愛からきたという証拠……………190

五 墮落の結果と終末……………194

第四章 救いについて……………199

一 救いの意味と保証……………199

二 救いと歴史の意味……………202

三 救いの原理……………204

(1) 善悪の分立……………204

悪の識別基準——堕落性本性

(2) 神の摂理と人間の責任分担……………210

(3) メシヤの派遣……………213

メシヤのための基命

四 救いの摂理の歴史……………224

(1) 中心史と補助史……………224

(2)	アダムの家庭を中心とする復帰摂理	226
(3)	ノアの家庭を中心とする復帰摂理	235
(4)	アブラハムの家庭を中心とする復帰摂理	239
	アブラハムとイサク・象徴献祭・実体献祭	
	ヤコブの家庭を中心とする復帰摂理・サタン屈伏の典型的路程	
(5)	摂理的同時性Ⅰ	254
	アダムからノアまでの年数・セムからアブラハムまでの年数	
	アブラハム以後の年数・理論値との比較	
	イスラエル民族のエジプト入国からイエス生誕までの主要年数	
	理論値との比較・二時代の年数パターンとの比較	

## 第五章 イエス・キリストの降臨とその意義

一	神とイスラエル民族	272
二	人間の責任分担と預言の二面性	274
三	十字架の意義	284
(1)	洗礼ヨハネの歩み	285

## 第六章 終末とキリストの再臨

(2)	十字架の背後の事情	297
(3)	十字架は神のみ旨か	302
(4)	「統一原理」の解釈	306
(5)	十字架の救いの意味	312
	終末とキリストの再臨	319
一	十字架の救いの限界	319
二	摂理的同時性Ⅱ	322
	イエス生誕より第一次世界大戦終了までの主要年数	
	理論値との比較・三時代の年数パターンの比較	
三	摂理の総決算——終末の諸徴候	336
(1)	終末預言の両面性	338
(2)	終末の消極的徴候	343
(3)	終末の積極的徴候	347
	第一祝福復帰の現象・第二祝福復帰の現象・第三祝福復帰の現象	

四 再臨	355
(1) 再臨預言の両面性	355
(2) イエス降臨における預言の両面性	359
(3) 新約聖書の預言との照合	364
再臨は目立たない・誤解と受難の予告・再臨はイエスの路程の繰り返し	
(4) 実体再臨の意義	368
(5) 空中再臨の預言の必要性とその意義	373
五 再臨を迎える心構え	376
(1) 消極的注意	377
(2) 積極的注意	379
六 再臨と私たちの救い	384

## 第一部 人生の意義と目的

とができるでしょう。だがそのためには、何よりもそのような全知全能にして愛そのものである神からの救いの力が必要であり、その神の存在そのものが確かでない限りなりません。そこで次に簡単に科学と宗教の両面から、このことを検討してみましよう。

## 二 神の実在性

それでは、人間の過去の罪をきれいさっぱり清算し、永遠の生命、永遠の幸福を与えてくださるような、愛にして全知全能なる人格神が確かに実在するという確証があるでしょうか。

### (1) 科学的側面からの検討

#### 物質の成り立ち

現代科学が明確に確認したことは、感覚でとらえられる物質世界はすべて分子から成り、分子は原子から、原子は素粒子から成るものだという事です。その素粒子は質量を持たないエネルギーの転化したものであると見られるようになりました。

「量子論では、真空を非常に高い位置分解能と時間分解能で観察すれば、虚無とはほど遠い

複雑なものに見えると考えられています。そこではありとあらゆる粒子—反粒子対が生れては消え、消えては生れつづけているのです。これらの粒子—反粒子対のどれを取っても「 $10^{-10}$ センチメートル以上離れることはありませんし、「 $10^{-10}$ 秒以上の時間生れつづけることはありません」(鈴木眞彦、釜江常好『素粒子の世界』(岩波新書)、岩波書店、四五ページ)。

これは量子論的な超短時間の真空と素粒子の相互転化の現象ですが、そのようなことが全宇宙的な規模で生じた。すなわち、物質はおろか時間も空間もない全くの「無」の状態から突如、密度・重力・温度無限大、体積無限小の「火の玉」が創生され、それが爆発して現在の宇宙に至ったと見るのが、今や小学生でも知っている物理学の常識(ビッグバン理論)です。現在ではこのビッグバンの前に「宇宙のタネ」を仕込んでインフレーションで膨らませる過程があったと見られるようになったといえます。それでも問題の本質は何ら変わりません。(ビッグバンの前に「宇宙のタネ」が仕込まれる過程があるというのなら、なおさらのこと、時間も空間もない無の状態の時に宇宙の構想を立てる能力を備えた何らかの精神的・人格的存在があった可能性があるということになり、五官では感じ取れないが人格を備えた存在——神が実在するということの有力な論拠となります。人間の心も五官でとらえることはできません。この心のような存在がビッグバンの前にあったと考えることは、したがって非合理ではありません。)

このような事実をとらえて、ビレンケンなどは、全くの無から宇宙が生じたと主張します。無

から有が生じると考えるのは合理的ではないでしょう。この前に、エネルギーや物質になる以前の何らかの物的実質——「前エネルギー」とでも呼ぶべきものがあつたと考えなければならぬのではないのでしょうか。このような状態のことを「統一原理」は、すべての外形（形状）の根本原因という意味で、「本形状」と呼んでいます。

さらにそれだけでなく、ビッグバンからごく短時間（三分くらい）の間に宇宙全体の基本的な在り方を決めてしまった超高度の「数理性」もまた、その前にあつたと考えなければなりません。またかくして生じた素粒子はただ偶然的に群がっているのではなく、鍵と鍵穴が合う以上の精密さで相互に結合して原子を形成し、原子も同様の精密さで結合して分子となり、生物ではさらにそれが細胞、組織、器官に組み立てられて動植物の体へと統合されていきます。したがって、素粒子には原子、原子には分子、分子には細胞になる……という目的が初めから内在していた（合目的性）と考えざるをえません。（目的など目に見えないという反論があるかもしれませんが、合目的に造られたことが明白な人工物でも、目的は見る事ができないのです。）

さらにそれらの素粒子、原子、分子……は寄り集まって、バラ、孔雀、人体、山河のような、芸術家が一生かかっても到達できないような「美」を生み出します。美も偶然的に生じたものだと考えることは困難です。さらに瞬間的に生成、消滅する雪の結晶でさえこの上なく美しいことから見て、これが自然淘汰の産物だと見ることもできません。

この数理性は何らかの知性、合目的性は何らかの意志、美は何らかの情的感受性があつて初めて生じるものです。それゆえ、ビッグバン以前に、本形状（前エネルギー）があつたばかりでなく、本質的に非感覺的な心的状態——知情意（知性・情的感受性・意志）も初めからあつたのだと考えざるをえなくなります。「統一原理」はこのビッグバン以前からある心的状態（知情意）を、すべての内性（性相）の根本原因という意味で、「本性相」と呼んでいます。

アリストテレスも似たような思想を持っていましたが、彼はこのうち知性に当たるものだけが孤立してあると見て、これを純粹形相と名づけました。アリストテレスはこの純粹形相こそが神であるとし、物質の根源となるものは第一質料（全く形を持たないが、どんな形でも取ることができるもの）として、純粹形相たる神の外に、別にあると考えました。すなわち、二元論を唱えたわけです。

近世哲学の始祖デカルトは、無限な実体としての神に支えられる二つの有限な実体として、五官で感知できない思惟を属性とする精神と、五官でとらえられる広がりや属性とする物質が初めからあり、この二つの実体の間には何の共通性も相互作用もないという別の形の二元論を唱えました。

それに対して、アウグスティヌスは、聖書に「神は霊である」（ヨハネ四・24）とあるところから、神を感覺ではとらえられない精神的存在だと見、物質は神によって無から創造されたと言

張しました。これは神一元論——唯心論の見方です。

それとは逆に、マルクス・エンゲルスの思想を物理学の進歩と調和させるため、レーニンは、「人間にその感覚において与えられており、われわれの感覚から独立して存在しながら、われわれの感覚によって模写され、撮影され、反映される客観的实在」と定義される物質をもって、精神（意識）を含む全存在の根源だと主張しました。唯心論とは正反対の立場に立つ一元論——唯物論です。

「統一原理」はこれらの見方をすべて否定し、すべての有限な存在の究極の根源は、先に述べた本性相と本形状とを互いに授受し合う二つの相対的属性とする唯一者だと見ます。アリストテレスのように、その根源を純粹形相（「統一原理」の本性相に当たる）と第一質料（本形状）だとする二元論の見方をせず、デカルトのように、精神と物質という全く異質の二種の実体があるとも見ず、また、アウグスティヌスのように、物質が無から生ずるといふ唯心論の立場も、レーニンのように、精神が物質から突如として発生するとしか説明しようのない唯物論の立場も取りません。すべてのものの根源は本性相と本形状の二属性の相対関係から成る唯一不可分の存在であり、その結果として、その根源から創造されたすべてのものは、いわゆる「物質」も、「精神」も、すべては性相と形状の相対関係から成るのだと見るのです。

なぜなら、二元論は、私たちが眼前にしている世界の一元性、不可分性を説明できないし、また、唯心論と唯物論は、それぞれ究極の根源とみなすもの（精神としての神、あるいは感覚によってとらえられる物質）とは明らかに異質なものが、全くの無から生ずるといふ不合理な考え方をしなければならなくなるからです。

「統一原理」は、宇宙の究極の根源、したがって宗教でいう神とはこのような存在であると見、そのことを「本性相と本形状の二性性相の中和的主体」と表現するのです。このように定義された神（前エネルギーと知意の統一としての神）は、今述べた理由によって、まだ時間も空間も全くなかったビッグバン以前から実在すると考えないわけにはいきません。そうしなければ、どうして時間も空間もないところから、ビッグバンが突如として生じ、またそのビッグバンから今私たちが眼前にしているような壮大・複雑・精妙な大宇宙が生じたかを、説明することができないのです。

注：「二性性相」とは、「性相」自体と、それと相対する「形状」という第二の性相との

二性から成るといふ意味で、この相対的な属性である性相と形状も、もともと同一の性質を持つもの（性相にも形状面、形状にも性相面がある）であることを意味します。両者の相違は、性相のほうが主体的、形状のほうが対象的であるということだけです。

さて、その神の一側面である本形状は、時間も空間もない全くの真空状態だと表現することができますが、その真空状態は粒子（陽性実体）と反粒子（陰性実体）をいつでも生み出せるよう

なぜなら、上述のように、デカルトは精神と物質とを共通点を持たぬ全く異質のものだと見、精神は空間的な広がりという性質を全く持たず、逆に物質（物体）は意識という性質を全く持たぬと見ましたが、まずそれが真実かどうか、科学的に見て疑問となってくるからです。

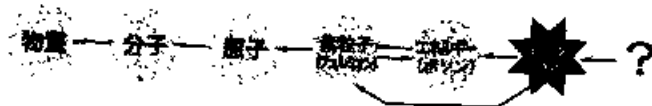
早い話が、私たちは心で「のどが渴いた。水が欲しい」と考えると、考えるばかりでなく、手の筋肉を動かしてコップに水を注ぎ、飲むことができます。筋肉は何によって動くかといえは、カエルから取り出した神経のついた骨格筋（神経筋標本）で、その神経に電気的刺激を加えたとき、初めて筋肉は収縮します。すなわち、筋肉はその神経に何らかの物質的刺激を加えたときだけ動くことが科学的に突き止められています。ところで、人間の心は筋肉を動かすことができず。それゆえ、心には何らかのエネルギー的（物質的）要素が備わっており、それが筋肉を刺

念にまさに相当するものですし、また、宇宙の根本は太極（無極）であり、その太極から陰陽が生ずるといふ中国思想の源流——易学の思想ともびつたり一致しています。

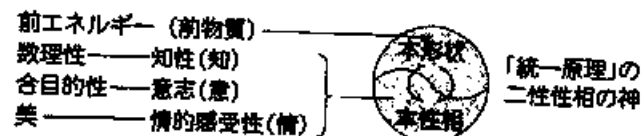
### 精神と物質の同一性

さて、「統一原理」が定義する性形・陽陰の二性性相の神は、今述べたように感覚でとらえられる物質Ⅱエネルギーの根源であられるばかりでなく、感覚ではとらえられない精神（心）の根源でもあると見ます。

図5



●ビックバン以前にあったと考えなければならないもの



な創造的なゼロの状態（中和的主体）です。

ホーキングも、「量子論によれば、粒子はエネルギーから粒子／反粒子対のかたちでつくりだされる」。ではそのエネルギーはどこから来たのかといえは、「宇宙の全エネルギーはびつたりゼロだ」（重力場は負のエネルギーを有し、これが物質に代表される正のエネルギーとびつたり打ち消しあう）と述べています（「ホーキング、宇宙を語る」早川書房、一七二ページ）。

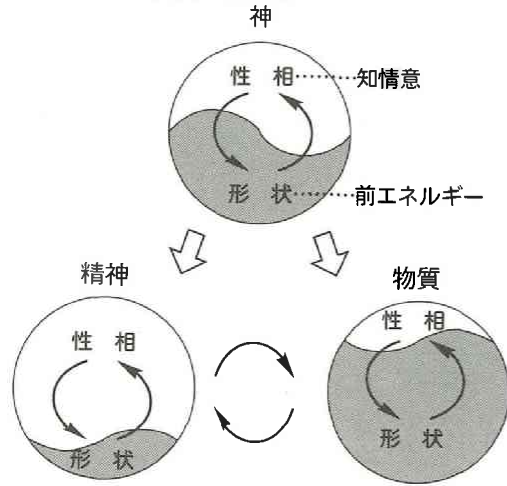
すなわち、全くの無の状態（真空状態）から正のエネルギー（物質）と負のエネルギー（重力場）が生じ、その正のエネルギーから、正の粒子と負の粒子（反粒子）が生ずるといふように、この物質世界はどこまでも無（真空）が正負に分極化して生じたものだというのが現代の最先端を行く物理学者たちの見解なのです。これは、仏教の「空」の概

激して筋肉を動かしたのだと考えざるをえません。

さらに、心痛が胃潰瘍や高血圧を引き起こすという心身症や、怒りを表現することの葛藤から失声や手の麻痺が生じたり、信じがたい事件を目撃したとき、生理的原因がないのにわか盲となるというヒステリー症状も、心に物的エネルギーが備わっていることを示すものだと思います。

逆に、ノーベル賞を受けた利根川進博士は、高等生物が何百万種もある外来の抗原を数百種の抗体遺伝子でどうやって対抗するかを研究したところ、襲ってきた抗原にちょうど適合するように、抗体遺伝子が自分でバラバラになり、その部分を適当に組み合わせて無数の抗体遺伝子を新たに作り出すことを発見したといわれます。もしそれが本当だとすれば、抗体遺伝子は物質で、それも高分子のレベルのものなのに、抗原

図6 精神と物質の同一性



の性質を的確に認識し、かつその認識をもとにして抗原を撃退できるような抗体の「暗号」を新しく創造するという知的操作——一種の思考の働きを有するといわなければなりません。これは、物質にも認識し、思考するという、原始的ではありますが、一種の心的能力（意識）があることを示すものです。

すなわち、心にも物的エネルギーが備わっており、物質にも心的能力がある。とすれば、心と物質という二種の異質の実体があるのではなく、どちらも両者を相対的屬性として持つ一種の同質の実体だと見るべきであり、単にそのどちらの屬性をより豊富に備えているかという点で量的差異があるにすぎないという結論になります。いわばそれは、カレー・ライスとライス・カレーの違いのようなものだといわわけで、このような存在観も「統一原理」が初めて明確にしたものです。（「統一原理」は宇宙にあるすべての存在者をこのようなものだと見るところから、精神、物質という実体概念ではなく、性相、形状という屬性概念で存在を規定します。）

以上のことから、先に述べた「統一原理」の世界観——すべてのものの根源（神）は本性相と本形状の二つの相対的屬性から成る唯一不可分の存在であり、したがってその根源から創造されたすべてのものは、精神、物質のいかに問わず、性相と形状の相対関係から成るというものの見方が正しいということが明確に検証されます。

また、物質の場合と同様、人間の精神（知情意）も、差別と無差別、喜びと悲しみ、創造性と

保守性というように、やはりすべて陽陰の対機能（両極性）から成っています。このことから、究極の根源は、本形状だけでなく、本性相のほうもやはり陽陰の対機能から成るものだと推定されます。

このことから、「統一原理」は、究極存在（神）における本性相と本形状の二性相が、それぞれたまた本陽性（すべての陽性の根源）と本陰性（すべての陰性の根源）の二性相に分極化された状態になっているととらえます。すなわち、陽的性相と陰的性相、陽的形状と陰的形状というように二重の相対関係から成ると見ます。このことを「統一原理」は究極存在（神）はまた、「陽性と陰性の二性相の中和的主体」でもあるというのです。

この陽陰の考え方は、上述のように、仏教や易学、さらにはそれらの総合である朱子学など東洋哲学を貫く根本概念であり、「統一原理」は、これと西洋哲学の形相（性相にほぼ当たる）、質料（形状にほぼ当たる）の相対性というとらえ方を、この上もなく明確に統一するものとなっているのです。

### 経験的事実としての神

さて、ここまでの考察は、物質と精神についての経験的事実から間接的に神の实在性を科学的に検証したものです。しかし、それだけではなく、神の存在は経験によって直接とらえられるも

のでもあるのです。

無神論的な科学者は、往々にして、神は感覚ではとらえられないということから、神は実在しないという結論を下そうとします。確かに神はその本性からして、感覚ではとらえられない存在です。しかし、心も同様、他人の心はいうに及ばず、自分自身の心であっても感覚ではとらえられません。しかし、心を一つの内的な感じとして、経験としてとらえることはできるのです。それと同様に、このあと、「宗教的側面からの検証」のところで述べるように、神は直接、体験できるものであり、その体験はしばしばその人の人生観を一変させてしまうほど強烈なものなのです。現に、拷問され、十字架にかけられても、神への信仰を棄てなかつた人は数多くいます。人間ははつきりと目に見えるもののために死ぬことさえ難しいのです。まして、何の明確な体験のない、単なる観念のために人は死ぬことができるでしょうか。

神体験には、ジェイムズの『宗教的経験の諸相』に記録されているように、感覚を伴わぬ霊的  
法悦や、祈りにこたえての啓示（心の中への語りかけ）、幻聴、幻視などさまざまなものがあります。私自身も一週間の原理研修会の折り、神を目に見せてほしいと熱烈に祈つた翌日、講義中、目の前にさし込んでいる光が色の千変万化するちりの渦となったのを見たことがあります。その感覚があまりに鮮やかだったので、隣の受講者に、「さっきはすごかったな」と言うときョトンとしていました。それで幻覚だということが分かりましたが、それを見た時には、光が実際に物

理的に変化したのだとしか思われませんでした。

このような形で、直接経験される神は、精神についての観察や実験から上述のように間接的にその存在を推論された性形・陽陰の二性性相の神とまさに合致するものです。

神の心情や思いは、以心伝心で、他人の心を感じずると同様の確かさでさまざまなと感じることがしばしばあります。また、神靈に接したとき、交響曲を聴いたときのような法悦にひたつたという体験も、私自身、始終ありますし、そういう他人の証しも数多く聞いています。心の内に思いが他動的に吹き込まれるということもあります。このことから、神には人間と同様の性相(心)があるということがはっきりと確認できます。

また、今述べた幻視や幻聴という現象、さらにはモーセの時のように紅海が真つ二つに分けられるといった物理的現象も、神に形状があるとすれば、十分にありうることだと理解できます。

しかし、特別の場合のほか、神体験は他人には直接には観察できない霊的なものです。「神は、目に見えはしなかったけれども、現前し給うた。神はわたしの五感のどれ一つにも触れはしなかったが、しかしわたしの意識は神を知覚した」(ウィリアム・ジェイムズ「宗教的経験の諸相」(上)「日本教文社、一〇〇ページ」というように)。また、自分にとつて全く予期しない外的なもののように体験される幻聴や幻視のようなものでも、それを人に見せることはできないし、写真に撮影することもできません。それは、自分の心を観察するのに似ています。心は自分のものでさえ目

に見ることができず、物的証拠として残るものがないから確認するのが難しい。しかしそのような現象でも、それを対象とする科学があります。それは心理学です。

心理学は人の体験の報告をそのまま事実だとは見ません。一つの客観的反応として記録し、そこで心的事実として何が生じたかは、例えば今までできなかったことができるようになったという目に見える行動の変化(例えばヒステリー症状の消滅)を根拠として推論するなどという方法を取ります。しかしそれでも科学として成り立つのですから、これと同様の方法で、例えば神体験によって、それ以外の刺激によって生じることが極めて困難だと思われる行動の変化(禁酒など)、人格の変化(敵を愛することなど)が生じたということを根拠として、神の実在性や性質の問題を科学の対象とすることも不可能ではないはずなのです。上述のジェイムズは、現にこのことの先駆的な試みを行っています。

観察や実験の厳密性を最も要求する物理学でさえ、電気や力や素粒子など、直接目で見ることはできず、その実在性や性質を推論することしかできないものを扱っています。それゆえ、科学的な方法で神にすることが推論できないという先験的な理由はどこにもないのです。

今日、神が科学で扱われていないのは、神体験者がいまだ比較的少数であること、物的証拠を示すのが困難であるとともに、科学に従事している知識人の多くが神を信じていないという事情のためだと思われます。しかし、このように明確な体験者がおり、かつその体験が他の科学的に

のためだと思われまゝ。しかし、このように明確な体験者がおり、かつその体験が他の科学的に発見された事実や法則と矛盾しない場合には、神が存在しないと断定するのは、それこそ全く非科学的な独断だとして考えられません。

「統一原理」は神について、性形・陽陰の二性性相という普遍的概念だけでなく、反証可能性を備えた、神を行動の主体者とする厳密な歴史法則をも提起しています。これは、長い神学の歴史において、「統一原理」だけがなした歴史的偉業なのです。

#### 知情意は脳の機能か？

さてこのような見通しについて、最大の心理的抵抗となるのが、心的機能（知情意）を担っているのは脳であり、脳がなければ知情意はありえぬという、現代人の根柢のない独断です。その独断を前提として、脳がまだ存在しない、ビッグバンの前時期などに、考えたり感じたりするという心的機能が生ずるはずはないというのが、神の実在性を否定する説得的な論拠となりえます。そこで最後にこの問題を扱うことにしましょう。

この問題についての最良の証人は、まさにこのような思い込みに基づいて、露出した脳に電気刺激を加えてその人間の反応を見るところという方法で脳の機能分化の詳細な地図を作成した、有名なカナダの脳外科医ペンフィールドでしょう。彼はこの研究の途中で、この思い込みについて強い

「積領」と名づけた部位を電氣的に刺激したときのことでした。そうすると、患者は過去に見聞きしたことを、映画のフラッシュバックのように細部に至るまでそのまま「再体験」しました。しかし患者はそれを現実に今起こっていることだとは全く思わず、このフラッシュバックについて医師に報告するとともに、そのことについて医師と論じ合ひさえたというのです。

ここで、患者が手術室にいることを伝える環境からの感情情報と、過去の再体験を生ぜしめる大脳皮質への電気刺激、これだけでも意識の流れはすでに二重になっています。その上さらにこの二つの情報を比較対照してそれについて報告、討議している意識が別にあるのです。これらすべてが空間的に枝分かれした脳に担われているのだとしたら、心は混乱状態に陥るはずですが、それゆえ、「神経機能のような回路を持たない」非空間的な心が脳とは別にあると考えなければならぬと最晩年（八十三歳）のペンフィールドは主張しているのです（W・ペンフィールド「脳と心の正体」法政大学出版局、一三六ページ）。

さらにその非空間的な心は脳の中央にある上部脳幹（間脳）の灰白質に接していると考えなければならぬといっています。なぜなら、随意運動の伝達路は上部脳幹の灰白質から始まり、そこから大脳皮質の運動領への迂回路を伸ばしそこで神経細胞の交感を行ってから下部脳幹を通過して下行し、脊髄で細胞連絡を行ったのち、筋肉に達します。

その筋肉運動と環境の情報は、感覚器官から伝導路を上行してまずいったん上部脳幹の灰白質

さらに最近大きな話題となっている「臨死体験」という概念を提起したムーディは、死の宣告を受けてから蘇生した人は、自分自身の物理的肉体から抜け出して「まるで傍観者のように自分自身の物理的肉体を見つめていた」(レイモンド・A・ムーディ『かいままた死後の世界』評論社、三二ページ)という体験を報告する例が極めて多いといっています。

この現象を科学的、批判的に検討した心臓病の専門医セイボムは、この体外離脱の体験を報告する患者が、例えば、自分の受けた手術場面について、胸骨をノコギリで切断したこと、手術の際の心臓の色と形など、目撃者でなければ知りえないことを述べていると指摘しています。

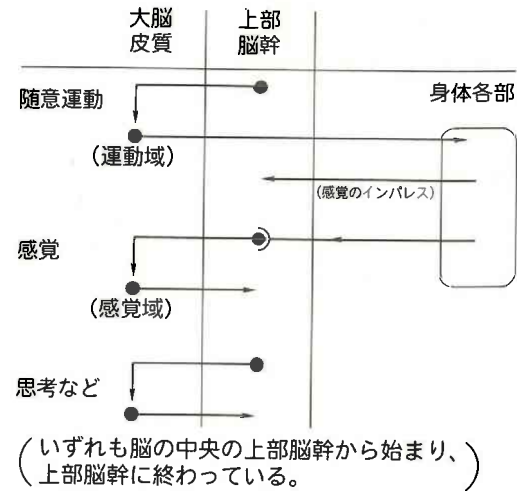
を補足する役割をになっているに過ぎないのだ——こう考えると、私は目の前がぱっと明るくなるのを感じた」(前掲書、五六ページ)。こうペンフィールドは述懐しています。

実際、唯物論的に何らかの空間的物質が統一的な判断や意志を担っていると考えると、「すべての情報を集約する『皇帝細胞』のような存在を仮定せざるを得なくなってくる。しかしそのような仮定は、一つの細胞に脳と同じだけの情報処理をもたせなければならず、細胞がまた脳をもつという奇妙な構図になりかねない」(茂木和行『無から生まれた宇宙』毎日新聞社、あとがき)。

また、現在、最高次の心的機能を担っているとみなされている大脳皮質は、かなりの部分を除去しても機能に大きな変化がなく、そのうちに「皇帝細胞」のようなものがあるとは到底考えられないのです。

割を務めているだけのようには思われるからです(図7参照)。

図7 神経伝導路のパターン

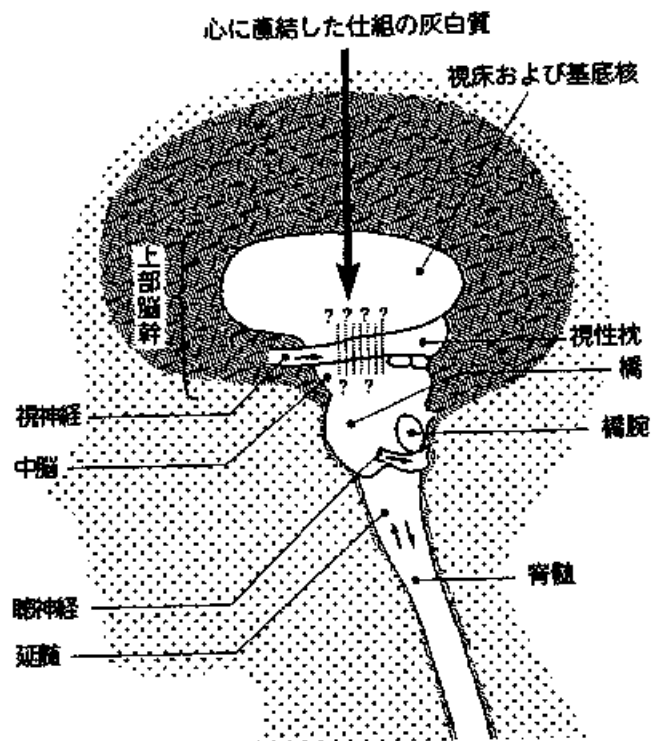


で神経細胞間の連絡を行ったのち、大脳皮質へ迂回路を伸ばしその灰白質で第二の細胞連絡を行い、そこから再び上部脳幹の標的核に戻ってきます。

さらに、思考などの心的機能に関連する活動電流は上部脳幹の灰白質に始まって、大脳皮質の側頭葉や前頭葉に迂回路を伸ばしここで神経細胞間の連絡を行ってから、再び上部脳幹に戻ってくるというのです。

すなわち、すべての心的機能の起点と終点は上部脳幹の灰白質で、大脳皮質はその打診を受けて心的機能を補助する役割

図8 ベンフィールドの脳機構の説明図



セイボムは、単なる想像や知識でこういうことを描写できるかどうかを確認するため、臨死体験者と同様の状態にあつて臨死体験をしていない心臓患者二十五名に、心肺蘇生法について語らせたところ、自己視型臨死体験者はほとんど誤りを犯さないのに、この対照群患者の八〇パーセントが少なくとも一つの大きな間違いを犯したという<sup>1)</sup>ことで、このような体験報告の信憑性をチェックまでしています(マイクル・B・セイボム『あの世』からの挿入)日本教文社、一〇三—一二ページ)。

さて、このように体外離脱してもなお五官や思考が残り、それが水統するのだとすれば、なおのこと心は脳の機能だとは考えられなくなります。さらに上述したように、抗体遺伝子のような高分子のレベルの物質にさえ一種の思考作用があると考えなければならぬケースもあります。もしそうなら、これと同様のことがビッグバンの前——時間・空間・物質が全くない状態のもとでもありえた。すなわち、時空や物質がないところでも心のような働きがあつて不思議ではないということになります。実際、心自体は感覚でとらえることはできず、時間・空間・物質の性質は何も持っていないのです。

以上のことから、心(知情意)は脳の機能、あるいは産物であるという非科学的な独断に基づいて、いわば「心」(本性相)と「真空」(本形状)の統一としての神が、感覚でとらえられる物質とは独立に存在することはありえないと主張することは、全く不適切であること。それは、科

学という名を借りた  
一つの無神論的宗教  
——「科学教」にすぎ  
ないことがお分かり  
いただけたでしょう。

ベンフィールドの  
言葉を借りていえば、  
「脳はコンピューター  
」、心はプログラマー  
」であり、この宇宙  
は、前エネルギー  
と相対関係を持ちつ  
つ働かれる無限の心  
——神によって創造さ  
れ、管理されている  
と見るからこそが、

真の科学的世界観なのです。現代科学は今もつばら、神の实在性を疑う余地なく証明する方向へ着々と進んでおり、その实在性を証明される神の二性質は、「統一原理」が説くような性形・陽陰の二重の二性質相の中和的主体であるということもますます明らかになりつつあるのです。

## (2) 宗教的側面からの検討

さて、このような科学的側面からの神の实在証明は、その証明の根拠として用いられている資料が厳密な科学の方法によって吟味されたものだけに確実性があり、また特にその方面の素養を持つ人々に対して強い説得力があります。現代は科学の時代であり、特に先進国においては、科学が明らかにした諸事実の教育、啓蒙が徹底してなされており、その批判に耐え、またそれらの見いだされた諸事実と少なくとも矛盾しない理論でなければ、社会的承認を得ることはできません。(このように、二、三百年前には想像することもできなかったほど多くの人々が論理的、実証的に厳密に物事を判断する能力と知識を備えるようになったということは非常に喜ばしいことですが、それだけに説得力を持つ論証をすることが難しくなつたともいえます。) その意味で、科学の面からの神の实在証明は非常に重要な意義を持つといえます。

しかしその反面、科学的厳密さがあるということは、日常的に、一般人から見れば異常な状況と思われるような宗教的体験(聖霊体験、入神状態)等に対しては、それが私たちの常識的な存在領域を超えた豊かなものであつても、科学的方法的批判に耐ええたものだけを残し、他を未解決のものとして保留するという狭さがあります。しかしそのようにして承認されたものが未承認のものより価値ある事実だとは限らず、むしろその逆である場合のほうが多いといふこともまた、考慮されなければならぬでしょう。

特に致命的なのは、その神の实在証明が、一つの推論であつて直接の体験そのものではないこととです。したがつて、こうした科学的神实在証明にとどまる限り、せいぜい、そう考へても非合理ではない、仮説として成り立ちうる、といった程度の消極的な支持しか得られないでしょう。

それに対して、宗教は推論ではなく、神についての直接の体験そのものです。その体験は遺憾ながらもまだ万人に共有されてはならず、いつでも任意にその体験を公衆の前で再現するということとは困難なので、科学で公認されるのはまだかなり未来のことになると思ひますが、それを体験したものとつては、紛れもない事実そのものであり、いかに拷問を受けようと、死をもつて脅迫されようと、その体験自体を否定することは本人には絶対できません。(簡単に信仰を捨てて神を否定する人は、神の存在を観念的に把握してただけで、神体験そのものをもつていなかったという場合が多いようです。)

例えば、啓示とか靈示、靈界の目撃など——こうした体験は本人にとつては、自分や自分の親の存在が確実なのと同じほど確実なもので、錯覚や幻覚のようなものではないとはつきりいえます。

すが、盲人ばかりの世界では目あきがかえって異常者だとされ、赤、黄、青などというさまざまの色があるなどというのは世を惑わす大詐欺師か、さもなくば氣違いだといわれるのと同じように、とんでもない誤解やヒステリー的な反発を招きます。ここに宗教的側面からの神実在証明の難しさがあり、科学的側面からの実在証明で補完されなければならない理由があります。

実際（このことを書き記している筆者をも含めて）神を信じている人の大部分は神を直接体験して知っているのです。しかし、いくらそういつても、神体験のない人には通じないので、やむをえず、科学的事実からの推論というかたちを借りて実在証明をしているにすぎません。それゆえ、神を信じている本人にとつては、神の実在性、人格性は実は推論ではなく、体験を通じてすでに事実として先取りされているのです。それは法廷での、「物証」を盾に取つての証言のごときものであり、あるいはちよつと失札な比喻ひよかもしれませんが、象の耳を触つて象とはウチワのようなものだと言ひ、鼻を触つて丸太のようなものだと言ひ張つてそれぞれ自説を譲らない盲人に対し、直接その目でその象を目の当たりにしている目あきが、それらはみな象の部分にすぎず、象は全体としてこういう形をしたものなのだと、盲人が体験している諸資料をもとに、「科学的」に説明しているのと似た状況です。

こうしたわけで、科学的な神の実在証明もその入り口としては必要ですが、それはどこまでも間接的、消極的なもので、どうしても最後には「象」そのものを目で見せること、すなわち、宗教的な神の実在証明が必要だと思われれます。

### 十字架信仰による救霊の事実

これまで神を信じてきた人々の多くは、今述べたような科学的、あるいは哲学的な推論によって神の存在を確信したものではありません。人間の認識の歴史的制約もあつて、むしろそうした神の実在性や神の意義や内容に関する説明（とりわけ後述するキリストの意義に関する説明）には、かなり不満な点がありました。そのために例えば、著名な護教家テルトゥリアヌスは「不合理なるがゆえに、われは信ず」と言つたと伝えられているほどです。

実際にテルトゥリアヌスが言つたのは、例えば、「神の子ははりつけに処せられたり。これ恥ずべきことなるがゆえに、われこれを恥じず。神の子は死せり。これ愚かなることなるがゆえに、絶対に信ずべし。神の子は葬られてよみがえる。これ不可能なるがゆえに確実なり」といった逆説的な表現を、後代の人が要約的にこう表現したもののようです。これは信仰の極致ともいえませんが、下手をするとそれが行き過ぎて、逆に「合理的なるがゆえに、われ疑う」という完全な盲信、非合理主義に墮してしまい、新しいものにとらえ方、聖書のとらえ方を一切受け入れないという頑迷さともなりかねません。特にともと、割り切つたものの考え方に反発する国民性をもつ日本には、こうした抵抗が出やすく、「統一原理」の新しい聖書解釈に対しても、それがあま

りにも合理的に説明されすぎているから、かえって信じられないという妙な反発があります。しかし、そのように合理性を否定したのでは、対話の余地がなく、進歩も止まってしまうことでしょう。

では、理論的な不備にもかかわらず、西欧を中心にキリスト教が全世界に非常な勢いで広がったのはなぜでしょうか。それは、洗礼を受けることを通して強い聖霊体験をし、その実感があまりにも強く、感動があまりにも深かったため、それ以上、神の実在性を証明する必要がなかったからだと思います。むしろその体験者に向かって神の不在証明をすることのほうがはるかに困難だったでしょう。一体、自分の親の実在証明をする必要を感じる人がどこにいるでしょうか。また、親の不在証明をどれほど論理的に巧妙に行ったところで、それによって説得される者がいるでしょうか。神体験をした者にとって、神が存在するということは、自分によって説得される者がいる自明であるのと同じくらい、いやそれ以上に確かで疑う余地のないことなのです。したがって、自分自身の確信を深めるために神の実在証明を必要とはしません。単に、まだそのことが分からないでいる人たちに分からせる手段として必要であるにすぎません。

この確信と感動がどれほど深かったかは、何度もキリスト教の絶滅を期して行われたローマ帝国の徹底的な弾圧、拷問、殺戮にも屈せず、かえって弾圧したローマのほうが滅亡したという歴史的事実からも分かります。

例えばネロは、ローマに大災害が起こった時（これはネロ自身の放火によるものと見られています）、彼はその責任をキリスト者に転嫁し、パチカン円形劇場に引き出して猛獣の餌食とし、十字架刑、火刑、牛の角にかけるなどあらゆる残酷な手口で殺害しました。使徒ペテロも、同じ処刑されるなら逆さ十字架でと自ら希望して殉教し、パウロも斬首されたといわれます。

ローマ末期の皇帝デキウスは、キリスト教徒が宗教と政治の分離を要求したため、国民統一の敵と考えてその絶滅を決意し、ローマ全域にわたって、少しでもキリスト教徒だという疑いのあるものは呼び出して、ローマの神々の前で香をたかせ、キリストの像につばを吐かせ、それを拒否する者はことごとく長期の拷問をかけ、改宗する意志がないと見ると死刑に処しました。

ヴァレリアヌス帝の弾圧はもっとすさまじく、信徒の集会を禁止し、礼拝に用いられていたカタコンベ（地下礼拝所）や墓地をすべて没収し、貧富、貴賤、老若、男女の区別なく、キリスト教徒は軽くて島流し、多くは殺害されました。アフリカのウジア市では生石灰の池を造って多くの信徒を生きたままその中に投げ込んで殺したといわれます。殉教者の中にはカルタゴの監督キプリアヌスまで入っています。

ディオクレチアヌス帝の時には、皇帝自身はキリスト教にかなり好意をもっていたようですが、地方の長官は依然として絶滅計画を継続し、元老院議員や政府の高官、大貴族まで、信徒であれば例外なく殺害したといわれます。

このように、ローマ帝国によるキリスト教迫害は実に三百年、十回に及び、そのうちにはストア学派の代表的哲学者の一人に数えられているマルクス・アウレリウスも含まれています。(彼もまた、数千に及ぶキリスト者を斬首、水中や猛獣のおりに投げ入れたりして殺したといわれています。)その手段も、投獄、財産没収、流罪、拷問、刑罰、死刑など、およそ考えうるあらゆる手が用いられましたが、一人殺されれば新しく信者が二人に、二人殺せば四人というように、増えていく一方で、とうとう三二三年、コンスタンチヌス帝はミラノの勅令を發布してキリスト教を公認し、三九二年にはテオドシウス帝の手によってローマの国教とされるまでに至ったのです。

こういうことがどうして起きたのでしょうか。人間は今現に目で見ているものをさえないかなかなか信じないものです。また、何よりも死を恐れるものです。それにもかかわらず、理屈の上ではなかなか信じがたいところのあるキリスト教を、このようにあくまでも死守したのは、現実に、イエス・キリストの血の代贖だいくと復活を信することによって、先に述べた力と確信、魂の平安、霊的な無上の喜び、確かな心のよりどころ、罪のゆるし、永遠の生命、それに何よりも無条件の至上の愛といったものが恵みとして与えられたからにほかなりません。

理屈は十分に分からなくても、実際にイエスを主として信じて悔い改めれば、神の命と連結され、救われて幸せになれた。ほかのことではいかに努力しても得られないものが、信ずることによって得られた。このことが、歴史の背後にある神の力とあいまってこのような奇跡を引き起こ

したのだと見られます(第二部第四章二参照)。

科学的な神の実在証明では、この宇宙の根源が全知全能の人格的存在であるというところまではいえても、その原存在(神)が本当に人間を自分の命以上に愛し、その幸福を願い、そのためあらゆる手段を尽くして人間を救おうとし、また上記のような人間の種々の欲望を満たすたまものを与えてくださるものだとすることは確実にいうことができません。しかし、これまでの十字架信仰がもたらした現実の無数の救霊の事実(他の宗教でも多かれ少なかれこういう体験が得られているのでしようが)——これが何よりの救われるということの証明となり、保証となるのです。

### 宗教の遍在性と共通性

神の実在性とその意志は、現生人類が現れ、農耕、牧畜などの生産革命が生まれるのとはほとんど同時に、すでに原始宗教が現れてきていることから分かります。なぜなら、宗教は人間がその本来の姿に戻りたいという渴望を満たし、魂の救済を与えんがためのものだからです。

メソポタミア、エジプト、インダス、黄河流域などの古代文明はみな神殿を中心として発展しています。この宗教意識が頂点に達するのは、紀元前六世紀ごろからイエス・キリストの出現までの五、六百年間で、ヤスパースはその時点に「最も深い歴史の切れ目」があるといい、この時

代を「枢軸時代」と呼んでいます。

この教世紀の短い期間に、ほぼ同時に、どれもが相互に知り合うことなく、中国では儒教、道教をはじめとする諸子百家、インドではブラーフマナ（バラモン教の伝統の上に作られた深遠なウパニシャッド奥義書）の哲学が展開され、また新しくジャイナ教、仏教など多種多様な思想が出現しました。地中海沿岸から中近東にかけては、ユダヤ教、ギリシャ哲学、ゾロアスター教などが、雨後の竹の子のように一斉に台頭してきました。

「この時代に始まった出来事といえば、これら三つの世界全部において、人間が全体としての存在と、人間自身ならびに人間の限界を意識したということである。人間は世界の恐ろしさとして自己の無力さを経験する。人間は根本的な問いを発する。彼は深淵を前にして解脱と救済への念願に駆られる」（ヤスパース『歴史の起源と目標』邦訳、理想社、一三三ページ）。

平たくいえば、この時代に、「全体としての存在」すなわち「神」と、「人間の限界」すなわち「罪」（不完全性）の意識と、その問題解決が自力だけでは不可能だという「無力さ」の体験から、「解脱」（インド思想）、あるいは「救済」（ユダヤ思想）を求めるような深い自己洞察をもつようになったということです。

ヤスパースは続けて、「この時代に実現され、創造され、思惟されたものによって、人類は今日に至るまで生きている……新たな飛翔を行なうたびに、人類はかの枢軸時代に想いをさせてそこに還帰し、そこから新たに情熱を掻き立てられるのである」（前掲書、三二一ページ）とまで言っています。確かに近代以後、科学技術や方法論の面では大きく飛躍を遂げました。しかし、肝心の精神的な思想内容の面では、この時代の思想が一層整然と整理統合されたというだけで、本質的な進歩はほとんど皆無に等しいといっても過言ではないでしょう。

さて、イエス・キリストの死後、ユダヤ教から新たにキリスト教、イスラム教が生じ、バラモン教を土台として生まれた仏教は小乗と大乘に分化し、バラモン教は一層発展拡大して今日のヒンズー教となりました。また、ギリシャ思想とインド、イランなどの東方文化との相互交流の結果としてヘレニズムが、儒教と仏教との統合として朱子学が、ヒンズー教とイスラム教との統合として新たにシク教が生まれるなど、さまざまの相互交渉や統合の動きも見られましたが、大局的には、ユダヤに端を発するキリスト教とイスラム教、インドから興った仏教とヒンズー教の四大宗教、ならびに宗教に準ずるギリシャ哲学と儒教（この両者はいずれも政治の根本原理として大いに利用された）が、世界を指導する理念として広く君臨しているといえましょう。

このうち、ユダヤ系の三宗教——ユダヤ教、キリスト教、イスラム教はいずれも典型的な啓示宗教で、いずれも神ご自身、あるいは神が送られた天使が特定の間人（預言者、士師、王、キリスト、使徒など）を通してその意志を語られたと信じられている正典（聖書やコーラン）を有し、神から人間に授けられたという性質のもので、したがって当然、一神教です。それに対して、

インド系のもは、人間が深い瞑想めいそうや座禪などを通して自ら悟りを開いたものを順次、理論化、体系化し深めていったもので、特定の正典が明確に決まっておらず、多神教、もしくは汎神論はんしんろん的な色彩が強いという、かなり大きな差異があります。

しかし、インド系の宗教でも、すべての神仏を同等においているわけではなく、ヒンズー教では、ブラフマン、ヴィシュヌ、シヴァの三神が、ちょうどキリスト教の三位一体の神のように、世界の主宰神（イーシュヴァラ）とされ、仏教でも、法華経では久遠本仏、真言密教では大日如来というユダヤ系の唯一神に近い信仰の対象、あるいは概念があります。ギリシャのゼウス、ローマのジュピターもそのような最高神です。神道のアメノミナカヌシ、タカミムスビ、カミムスビの三神もヒンズーの神概念と似ています。さらに、儒教の天、ギリシャ哲学の善のアイデア、本質、実体などという概念も唯一神に通ずるところがあります。

さらに、宇宙の根源と人間との関係についても、ブラーフマナ（バラモン教）の奥義書であるウパニシャッドでは、宇宙の根本原理であるブラフマン（梵）と個人原理であるアートマン（我）とは本来同一でなければならぬと見、この宇宙即我（梵我一如）の真理を感得することをもつて解脱とし、それを修業の最高目標としています。これは、「神は自分のかたちに人を創造された」（創世記一・27）というユダヤ系の宗教の人間観と一致するところがあります。

また、世界的な高等宗教においては神と人間との間を媒介する特定の中心人物を認めるのが普

通で、キリスト教のイエス、イスラム教のムハンマド（マホメット）、仏教のゴータマ・シッダールタ（釈尊）、ジャイナ教のバルダマーナ、儒教の孔子、道教の老子などがそうで、ギリシャでもソクラテスがそれに近い尊敬を払われています。

教義も、キリスト教でいう愛と真理に重きが置かれている点で相似しています。イエスの「何事でも人々からしてほしいと望むことは、人々にもそのとおりによせよ」（マタイ七・12）の教えと、孔子の「己れの欲せざる所、人に施すことなかれ」（衛霊公、二四）とは、積極と消極、表と裏のようによく似ています。キリスト教の愛、仏教の慈悲、儒教の仁の概念の相似、キリスト教の奉仕、仏教の布施ふせ、イスラム教の喜捨（ザカート）。キリスト教の真理、仏教の仏法、儒教の道。さらに、因果応報や天国と地獄の概念、来世（霊界）の存在の確信、「神の国」や「王道楽土」などの未来の思想の類似、終末（末法）の時代の到来の確信等々、共通点を挙げればきりがないほどです。行動面でも、礼拝、断食、巡礼、施し、殺生かんじんや姦淫かんいん、盗み、虚言を禁ずるなどの共通性が見られます。聖職者が独身を守ることを要求されるという点も似ています。

このような相似性とともに、また相補性もあります。例えば、仏教は世俗的な栄華のはかなさ、無常観を徹底的に説き、キリスト教はキリストを通じて神の命とつながり新生、復活するという点に重点が置かれ、儒教はそののちに問題とされると思われる理想家庭や理想国家の在り方を詳細に追求するといった具合です。

これらの事實は、神が一人の人間も滅びることなく、上述のような諸欲望、特に靈的、精神的な渴望を満たして救われるように、時代や環境、民族性、心霊や知能の開発の程度、知識などに従い、人間の求めに応じて、広く救いの手を差し伸べておられたことを示すものではないでしょうか。そうして最後には、いくつもの川が合流して一つの大河となって海に流れ下っていくように、計画的、総合的に摂理を進めておられる証拠ではないでしょうか。(このことについてはさらに第二部で詳しく触れます。)

「神は人をかたよりみないかたで、神を敬い義を行う者はどの国民でも受け入れて下さる」(使徒行伝一〇・34-35)。

「終末の完結をまっけて初めてわれわれは、魂の一致に達し、愛しつつか向かい合い、隔てなく了解しながら、永遠の靈の唯一の王国に所屬しながら、あいまみえるのである」(ヤスパーズ、前掲書、一九ページ)。

### 聖書の一貫性

最後に、口伝による伝承の時代も含めると、およそ千五百年間、四十人内外の著者によって書かれた六十六の啓示や歴史の叙述を集大成した聖書は、あたかも一人の著者の手によって書かれたもののように首尾一貫して、矛盾するところがありません。これはその背後に、人間救済の強

い意志をもつ人格的存在——神があり、その一人一人の著者を導いて語らしめられ、書かしめられたとしか考えられません。またそこには数々の予言がなされ、それは次々に成就しております。これは最も良い、直接目で見て確かめられる神の実在性、ならびに神に救済の意志のあることの証明といえるものですが、その詳細は第二部第一章に説明されているので、ここでは単にそのような確固たる、いわば証拠物件があるということを指摘するにとどめておきましょう。